

(株)東機貿創立45周年記念シンポジウム・ヴィタリテ

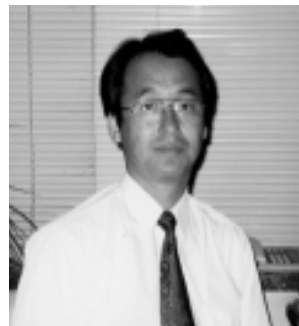
マチウ・リカル師の講演を聞いて

横田 浩史

1999年5月22日、新評論発行の図書『僧侶と哲学者』の著者であるマチウ・リカル師を囲んでのシンポジウム「自分と世界 (action on oneself and action on the world)」を開く機会に恵まれた。その本は現代フランスを代表する哲学者ジャン＝フランソワ・ルヴェル氏との共著である。書の話題は、神経生理学、心理学、ギリシャ哲学、宇宙、量子論、認識科学から精神分析まで、多岐にわたって二人の知識人が討論する形となっている。しかし、本書の論鋒はただひとつ、現代において人生の意味をどこに求めるか、に他ならない。リカル師はルヴェル氏の息子で、国際的に有名なパストゥール研究所においてノーベル医学賞受賞者フランソワ・ジャコブ教授の指導のもとに理学博士号を取り、前途洋々の分子生物学者の道を進んでいたのに、突然方向転換して、チベット仏教の修行に向かい、ダライ・ラマの弟子となり、ヒマラヤで既に27年という



講演中のマチウ・リカル師



横田 浩史 / まきた・こうし

1957年生まれ。1981年東京医科歯科大学医学部卒業。1988年ロンドンのクリニカルリサーチセンターにてDr. John Nunnのもとで研究に従事。東京医科歯科大学医学部麻酔蘇生学講座講師、助教授を経て、1999年4月より同教授。

異色の経歴の持ち主である。

リカル師の講演のあと2時間におよぶパネルディスカッションが開かれた。宗教学の廣澤隆之氏の名司会によって、天文学の海部宣男氏、免疫学の多田富雄氏、生命科学の中村桂子氏、ロボット工学の森政弘氏、仏教学の横山紘一氏というそれぞれの専門分野では当代一流の先生方がそれぞれの立場から、人生の意味、宗教などについて意見を述べられ、リカル師のコメントをまじえながら討論が繰り広げられた。

講演とパネルディスカッションにおいてリカル師が強調されていたのは、人生の意味 (meaning of life) をどこに求めるかである。師の言葉を拝借すれば、人生の意味は幸福の追求 (quest of happiness) にあり、その幸福 (happiness) は深い達成感 (deep sense of fulfillment) によってのみ得られる。この深い達成感あるいは充実感、利他主義に基づいた行動すなわち他人の苦悩 (suffering of others) を癒す行動によって得られる。利己主義を解消し、平穏な親切心を獲得することの重要性を語られ深い感銘を受けた。



パネル・ディスカッション (慶應義塾大学三田校舎北新館ホール)



さて、チベットに修行にだって悟りを開くことができない私のような凡人は、人生の意味を自分の仕事である麻酔に当てはめて行動するしかない。麻酔科学を通して他人の幸福をできる限り手助けすることが自分の使命であって、この視点を忘れてはならないと強く感じた。医師という職業が、まさに他人の苦悩を癒す職業であることは幸運である。しかし、どんな小さな点においても患者さんの立場に立って診療しているかどうかを常に反省しなければ十分とは言えないと感じた。大学にいる者としては、学生や研修医の教育、臨床、研究のいずれにおいても（あるいはどれか一つでもよいから）この深い達成感を味わいたいと念願している。教育によっていい医者を世の中に送り出せばより多くの人を助けられるだろうし、研究も臨床と結びついたら大きな成果となる。しかし教育はとてつもなく難しい。どのように講義をしたら学生が興味を持って勉強に励んでくれるかと考えても、実効は上がらないし、学生をひきつけるパーソナリティもないとあっては、とにかく一生懸命にやるしかない。臨床では、できる限り患者さんに親切に接し、麻酔中はもちろんのこと術後の合併症も起こさないように、また術後の痛みもできるだけ少なくなるようにと麻酔をかけているものの、患者さんを100%満足させているとはまだまだ言い難い。研究は自己満足に終わることが多く、患者さんに福音をもたらしたものは皆無に近い。それでも自分自身が日々の臨床、教育、研究において、利己主義を捨て利他的に行動するとはどういうことかを考え、利他主義に基づいた行動をするための精神力を高めなければならないと感じている。

リカール師は著書の中で、「人は認識、つまり精神的完成とも呼べるもののなかから、知恵や、完全な充足、心の静寂を得ることができると思います。」「私たちは朝から晩まで、生活のどの時間でも自分の精神を相手にしているので、この精神をほんの少しでも変えるなら、私たちの人生の流れも、私たちの世界観も、大きな影響を受ける。」「しかし、三十年生きようと、百年生きようと、人生の質の問題は同じままである。質の高い人生を送る唯一の方法は、内面的に人生に意味を与えることだ。そして、内面的に人生に意味を与える唯一の方法は、私たちの精神を知り、変えるこ

とだ。」と、精神を高める意義を強調している。そしてその精神に基づいて行動することが他人に幸福を与えるのだらう。書の最後にある「仏陀がしばしば語っているように、“道は自分で歩かねばならない”。そうすれば、いつの日か、ことづてを運ぶ者自身がことづてになる。」という言葉は、まさにその道を歩いている人から溢れ出た言葉であり感動的である。

本誌読者の方々には、それぞれの道を探るために日々研鑽し、すでにこのdeep sense of fulfillment を得られていることと推察いたしますが、興味のある方には一読をお勧めしたい。



懇親会会場にて（同大学旧図書館大会議室）